

2021年10月1日より、大慈弥裕之教授の後任として形成外科の教授および診療部長に就任致しました。私は1995年に大阪大学医学部を卒業後、大阪大学形成外科に入局しました。その後、関連病院勤務や海外への臨床留学を経て、2009年4月より当院の形成外科診療に携わっています。福岡大学病院に形成外科という診療科ができて今年で25年。福岡市内でそれほど前から「形成外科」を掲げている病院は数えるほどしかありません。当科はその長きにわたる地域連携、診療経験、治療実績に基づき、とても幅広い領域で治療にあたっています。ここでは、当科が特に力を入れている分野についてご紹介します。

① 小児形成外科

我が子の健やかなる出生を望む親の気持ちは万国共通。その中、出産後に初めて、我が子に体表先天異常があるとわかった時のご両親の不安は相当なものですし、目で見てそこに異常があるとわかるだけにその心痛も尚更です。われわれは、ご家族が安心して治療に向き合ってもらえるようまずは十分な説明を行い、適切な時期に適切な処置・手術を施しながら、親御さんとともに成長を見守っていく気持ちで治療にあたっています。唇裂・口蓋裂、頭蓋縫合早期癒合症を含めた頭蓋・顎・顔面の骨性異常、漏斗

胸には特に力を入れており、関連諸科と密接に連携を取りながら治療に取り組んでいます。

② 急性外傷から慢性創傷まで

顔面の切り傷やひどいすり傷、顔面の骨折、熱傷、褥瘡、糖尿病等に伴う足の傷(フットケア)といった「体表面のキズ全般」と、ケロイドや肥厚性瘢痕といったその「傷あと」を診ています。決して傷あとを消せるわけではありませんが、どうしたらすこしでも目立たなくできるか、なかなか治らないキズをどうしたら治せるか、と考えながら治療にあたっています。

③ 再建外科

悪性腫瘍切除や重度外傷などで大きな組織欠損が生じたときには、体の他の部位から組織を移植して形を作り直します。これを「再建」といいます。特に乳房再建には力を入れていて、乳がんによって乳房を失ってしまう喪失感を少しでも軽減し、自信をもって日々を過ごしてもらえるように、とお手伝いしています。

④ 眼瞼下垂症

まぶたが下がって視野が妨げられている。常日頃、額に力を入れて、かろうじて目を開けている。このような場合には手術加療の対象となります。機能面だけでなく整容面でも改善が得られるので、抗加齢医療の一分野

でもあります。

総じてわれわれ形成外科医が作っているのは「形」であり、3Dカメラや3Dプリンターを用いて評価を行ったり、あるいはそれを治療プランニングに応用したりして、さらにより良い結果を出すべく取り組んでいます。

当科には私以外にも知識や経験が豊富で優秀な医師が多数在籍しており、引き続き彼らとともに「あたたかい医療」を実践してまいります。些細な形態の変形や異常であっても、当の本人にとってはそれが大きな悩みであったりすることはよく理解していますので、まずは勇気を出してご相談ください。これを読んでくださっている皆さんにわれわれ形成外科医の技術と知識を上手く活用してもらい、最終的には患者さんがQOL(Quality of Life、生活の質)高く笑顔にあふれたHappy Lifeを過ごしていただけることがわれわれの望みです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



形成外科
診療部長 高木 誠司
たかぎ さとし

2022年

新年のごあいさつ

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

長引く新型コロナウイルス感染症の対応に追われる日々の中、集団接種、職域接種、宿泊療養施設支援や幾度もの緊急事態宣言を受けての対策等、みなさまに多くのお力添えをいただき誠にありがとうございました。現在は、オミクロン変異株への対応に追われていますが、日本国内ではコロナ感染者数も第5波後は比較的落ち着いた様子を見せています。まだまだ収束には時間が必要ですが、引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。

昨年は、待望の第32回のオリンピック競技大会が東京で行われました。世界中に新型コロナウイルスの感染が拡大したため、史上初めて1年延期された開催になりましたが、選手の気力に満ちた活躍もあって日本のメダル数も大会を通して金メダル27個、銀メダル14個、銅メダル17個の合計58個で過去最多の獲得数となり多くの感動をもらいました。またアメリカ大リーグでの大谷翔平選手の大活躍も明るい話題になりました。

「Make Future Hospital」をコンセプトに安全な医療の提供、患者にやさしい病院、高度先進医療の提供、地域中核医療施設としての貢献等を掲げ、皆様と議論を重ねてきた病院新本館(仮称)の新築工事は、昨年10月から着工しています。順調に進めば、いよいよ来年末には完成します。建物は地下1階地上12階で屋上にはヘリポートを設置しています。様々な最新機能や装備を取り入れるとともに、患者さんの療養環境の向上に配慮した建物です。

しかしながら、重要なことは、質の高い医療は機器や建物などハード面ではなく、そこで働く職

員の意識や能力により、大きく影響を受けることです。幸い福岡大学病院は、この点でも高い評価をいただいておりますが、今年も更に職員一丸となって努力してまいります。新本館と良い人材を充実させて、大谷翔平選手のように「医療のリアル二刀流」が実現できる日も近いのではないのでしょうか。

本年は、「壬寅(みずのえ・とら)」が干支です。春の生命力に溢れ、華々しく生まれることを表すとされるようです。アフターコロナでの社会活動と、医療現場での本来の日常が戻ることを予感する年になるよう皆さんと願っています。



病院新執行部と事務部門



臓器移植医療センター紹介

臓器移植医療センター

福岡大学病院の臓器・組織移植

福岡大学病院は、1)脳死・生体肺移植、2)献腎・生体腎移植、3)角膜移植の実施施設です。こ

のうち肺移植は、国内10カ所の指定施設の一つとして九州の肺移植を担っています。腎移植・角膜

臓器移植医療センターの役割

① 安全な臓器・組織移植の実施

移植医療には通常医療とは異なった厳格な倫理的配慮が必要です。特に、脳死臓器移植は「臓器の移植に関する法律」という特別な法令に基づいて実施されま

す。臓器移植医療センターは福岡大学病院の移植医療が倫理的かつ安全に適正実施されるよう、厳重な管理を行っています。併せて三つの移植領域が相互に協力し、福岡大学病院の移植医療の発展に努めています。

各移植領域のトピックス

① 脳死・生体肺移植

2020年度には福岡大学病院の肺移植件数は、国内10施設の中で東大、京大に次ぐ第3位、移植待機患者数は第4位の規模になりました。2019年にはベトナム共和国での脳死肺移植を指導(執刀)するなど、国際的貢献を行う機会もありました。2021年春には述べ肺移植数は50件に達し、九州一円に安定した肺移植医療を提供しています。

も一時移植を停止しました。医療資源が確保され、院内PCR体制が整備された後に移植を再開しています。血液型不適合移植、二次移植、高齢患者が増加し、合併症も複雑になっています。対策として移植希望者の術前検査を全て内科で行い、移植の適応や時期を腎泌尿器外科と綿密に協議しながら実施する体制を確立しました。

② 献腎・生体腎移植

2020年度は生体腎移植を4例実施しました。新型コロナウイルス感染流行に伴い、日本移植学会は待機が可能な生体移植の延期を勧告する指針を発表、当院

③ 角膜移植

2020年度、角膜移植は57例を施行いたしました。海外ドナー角膜を使用することで角膜が安定供給されており、コロナ禍の昨今ですが、待機期間は2か月程度の予定手術での施行を維持していま

移植もそれぞれの移植分野における地域の中核的施設です。

② 臓器提供の支援

移植医療は善意の臓器提供があって初めて成立する医療です。臓器移植医療センターは救命救急センターと協力し、脳死及び心臓死の方からの臓器提供が円滑に実施されるよう支援をしています。

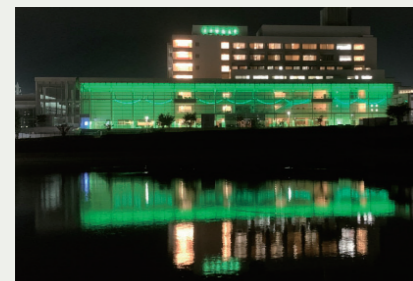
す。角膜移植の適応疾患は水疱性角膜症や円錐角膜といったオーソドックスなものから感染症などにも応用し多岐にわたっています。



ベトナム共和国「第108軍病院」で同病院初の脳死肺移植を執刀する福岡大学病院チーム

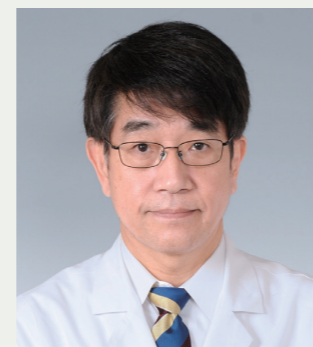
Last Willとしての臓器提供について「Green Light-up Project」

最近ドナーカードが普及し、Last Will(最後の意志)として臓器提供の意志を明示する人が増えています。しかし、日本では



「Green Light-up Project」中の福岡大学病院新診療棟

外国と比較して未だに臓器提供数が少なく、移植を待ちながら亡くなる方が数多くおられます。臓器移植ネットワークは、臓器提供啓発のため毎年10月に「Green Light-up Project」として全国のランドマーク施設を移植のシンボルカラーである「グリーン」にライトアップします。臓器移植医療センターは病院と協力し、今年からこれに参画いたしました。多くの職員・地域の皆様が移植医療に対する福岡大学病院の熱意を感じてくださったものと思います。



臓器移植医療センター
センター長 白石 武史
しらい たけし

臓器移植医療センター紹介

移植コーディネーターは提供者と移植者をつなぐかけ橋です

臓器移植とは

病気や事故によって臓器の機能が低下し、移植でしか治らない人に、他の人の臓器を移植し、健康を回復させる医療です。臓器

移植には亡くなった人からの臓器の提供による「脳死下・心停止下移植」と身内から臓器の一部を提供してもらう「生体移植」がありま

す。臓器移植は善意による臓器の提供、そして広く社会の理解と支援があって成り立つ医療です。

*日本臓器移植ネットワークHPより一部抜粋

移植コーディネーターとは

医療におけるコーディネーターは、臓器移植のような複雑で難しい治療現場において患者さんと医療者の調整を行う役割を担う職種です。

福岡大学病院には移植を受ける患者さん(レシピエント)のケアを行う「レシピエントコーディネーター(2名)」と、脳死あるいは心停止後の臓器提供の際に提供者のご家族のケアを行う「ドナーコーディネーター(1名)」の2種類のコーディネーターが活動しています。

要な説明を行い、臓器提供がスムーズに行われるように調整する役割を担うのがドナーコーディネーターです。臓器提供の申し出があった際には「臓器移植ネットワーク」と連携をとり、ご家族の支援や院内外の調整を行います。当院では救命救急センターの師長が担当しており、現在は川鍋師長が兼務しています。

施する際の患者搬送の手配など、職務は多領域に及びます。また、生体移植においては生体ドナーへの支援も併せて実施します。当院では肺移植(当房看護師 手術部所属)と腎移植(横山看護師 5東病棟所属)の2名が兼務でこの職務にあたっています。



左 : 当房悦子
レシピエントコーディネーター(肺担当)
中央 : 川鍋智子師長(救命救急センター)
ドナーコーディネーター
右 : 横山陽子
レシピエントコーディネーター(腎担当)

② レシピエントコーディネーター

大変複雑な臓器移植医療の現場において、移植を希望する患者さんの診療支援を総括的に行うコーディネーターです。臓器移植ネットワークへの登録作業や臓器移植医療に関する患者教育や公的医療補助の支援、遠隔地の患者さんに対しては緊急に移植を实

① ドナーコーディネーター

不幸にして脳死状態になられた方が脳死臓器提供をされる場合、あるいは心臓が止まった後に臓器提供される場合に、ご家族に必

いのちをつなぐ

移植コーディネーターの大切な役割のひとつとして、医療スタッフや一般の方への移植医療への理解を深めるための普及啓発活動があります。毎年、本学や看護学科の学生対象に「移植医療」や「生命倫理」をテーマにした講義を行い、移植医療への理解を深めていただ

く努力を続けています。

福岡大学病院では脳死・生体の各移植が活発に行われていますが、残念ながら脳死・心停止下臓器移植が大変少ない現状があります。私達コーディネーターは、患者さんやそのご家族により臓器提供の意思表示がなされた場合にその意思を汲み、臓器提供が実現できるように脳死下臓器提供の院内体制整備にも取り組んでいます。

臓器移植は脳死ドナーからの移植であっても、生体ドナーからの移植であっても、善意の方の提供があって初めて成り立つ医療です。私達、移植コーディネーターはそれぞれ立場は異なりますが、「ドナーさんやご家族の想いを汲み、いのちをつなぎ、移植を待つ一人でも多くの患者さんを助けたい。」

という共通の想いの中で日々活動しています。臓器移植を通じて、一人でも多くの患者さんが救命され、日常生活が取り戻せるように移植医療の普及に貢献することが、私達移植医療に携わる者の役目でもあり課題でもあります。



手術部
レシピエント
コーディネーター
(肺担当)
当房 悦子
あつこう えつこ



臓器移植医療センター 構成メンバー
肺移植 : 白石武史教授・早稲田龍一・宮原聡・当房悦子
腎移植 : 羽賀宣博教授・升谷耕介教授・中村信之・横山陽子
角膜移植 : 内尾英一教授・原田一宏
救命救急センター : 喜多村泰輔・川鍋智子師長